



神話の時代から
さまざまな物語に
彩られた道

松戸街道史

歴史

JR市川駅から松戸方面に南北に走っているのが県道市川松戸線、通称松戸街道だ。
和洋女子大学、千葉商科大学、東京医科歯科大学、国府台高校などいくつもの学校が立ち並ぶ文教地区。実はこの街道こそ、まさに市川の発展の原点ともいえるべき歴史的に重要な史跡や、びっくりするような逸話が数々存在する場所でもある。
古代のロマンから江戸・近現代までの歴史を彩る街道をぜひ堪能してみたい――。

協力＝市川博物館友の会副会長 森巨男さん

街道を歩く

散歩

1 市川関所跡

松戸街道の起点にあるのが「市川の関所」だ。このあたりの渡船場としての歴史は古い。大化の改新（645年）の後に国府台に下総国の国府が置かれたころから、渡し場として重要な位置を占めていた。江戸時代に入って1616（元和2）年、幕府が関東周辺の主要な河川に定船場を設けたのは、江戸防衛のため。江戸川流域では松戸、

市川に設け、その他の場所でも通行人を渡すことを厳しく禁じた。渡しに置かれた番所が関所に昇格したのは元禄の頃からではないかと思われる。この関所は小岩・市川間で小岩側にあったが「市川の関所」と呼ばれることが多かった。当時は10坪ほどの建物や出入り口



2カ所に黒塗りの門が設けられていた。さらに条目を書いた高札が掲げられ捕物道具などが立て並べてあり、関所を通る者に対して威圧的な雰囲気を作らせていた。

しかし、維新にともない1869（明治2）年に関所は廃止に、その跡には江戸川の堤防が築かれたために、現在では碑が建つのみになっている。

2 国府神社

文化年間（1804年～1818年）に出版された『葛飾誌略』にある「鵜王社」の項に、「日本武尊（ヤマトタケル）が武蔵国に向かうとき、軍勢を従えてコウノ台に来た。しかし太日川（江戸川）をはじめ多くの河川が洲を作って流れているのを見て、何とか歩いて渡ることができないものかと思案